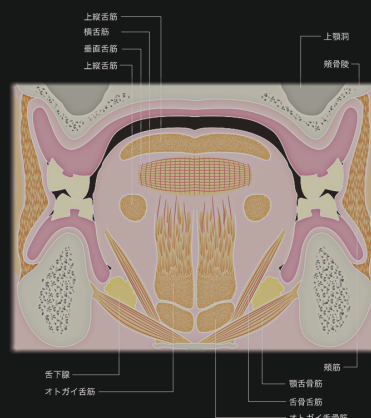
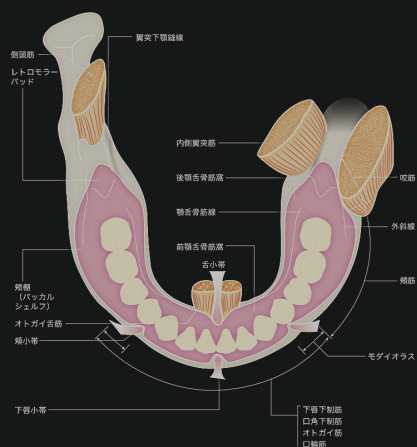
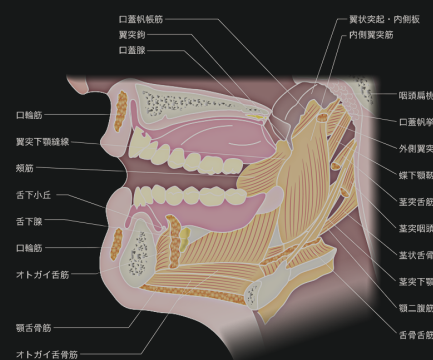
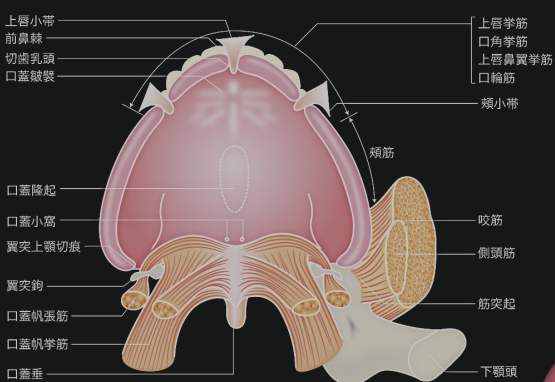


Designing Complete Denture

デザイン・コンプリートデンチャー

小出 馨 編



医歯薬出版株式会社

全部床義歯の周囲組織との調和

口腔解剖の理解の重要性

全部床義歯の維持・安定のためには、機能時における周囲組織との調和が重要である。したがって、治療を進めていく際に、前章で示した関連する口腔解剖を十分理解しておくことが必要不可欠といえる(図1～8)。

1. 上顎の全部床義歯に関連する口腔解剖

上唇の表情筋には上唇挙筋、口角挙筋、上唇鼻翼挙筋、口輪筋の4つがある。これらの筋の収縮による上唇と上唇小帯の運動は、上顎義歯唇側における床縁の位置と辺縁形態、研磨面の豊隆に影響する。

上顎義歯頬側部では、頬筋、大頬骨筋、小頬骨筋、笑筋の4つが影響する。

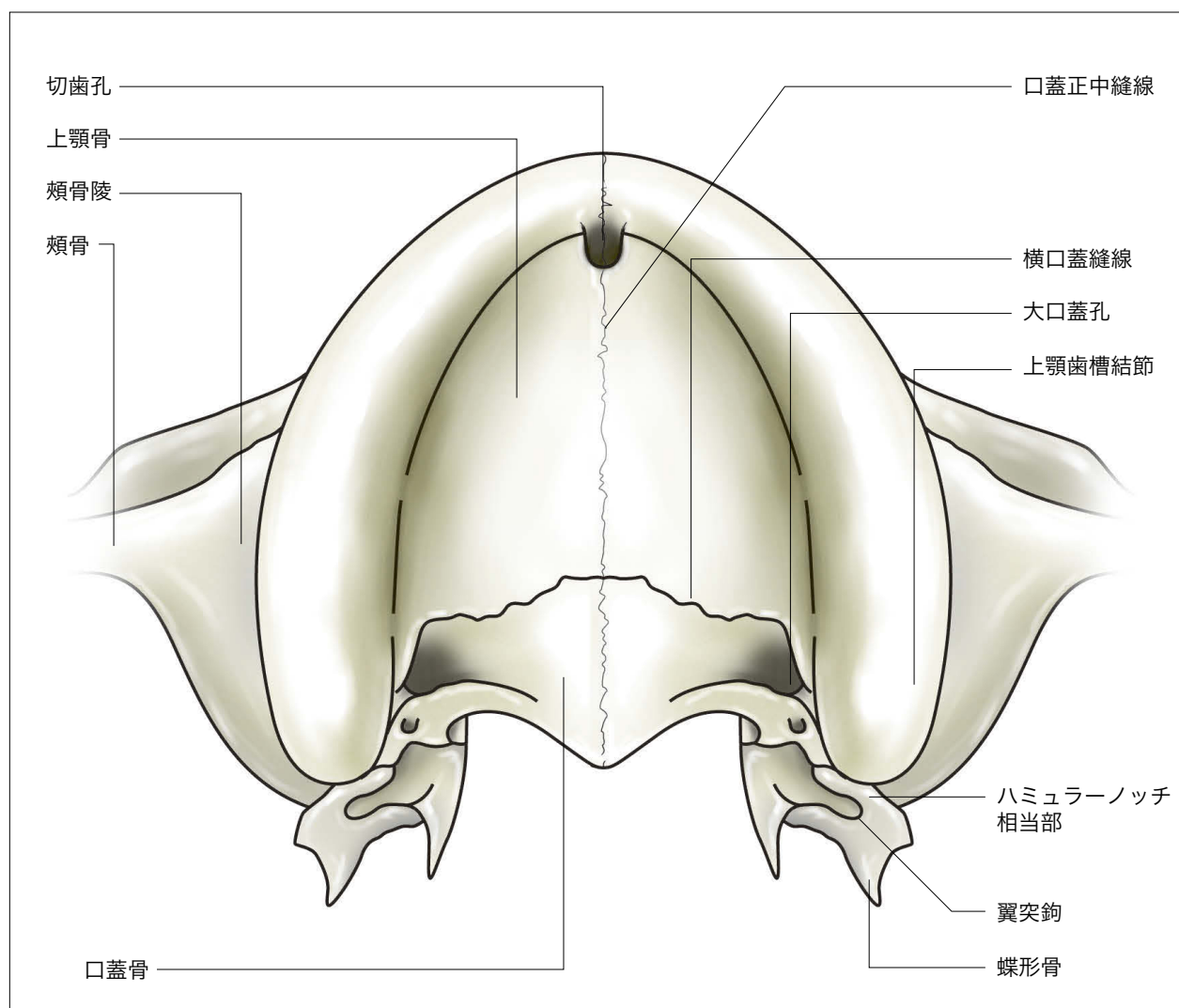


図1 上顎骨を咬合面方向から観察した状態

6 個人トレーの製作

個人トレーの製作基準とそのポイント

機能印象における筋形成と最終印象は、個人トレーを用いて行うのが原則であり、個人トレーが適正に製作されているか否かが、機能印象の成否を左右する。本項では、個人トレーの製作基準と、臨床に役立つ製作のポイントを示す。

1. 個人トレーの製作基準 (図 1～13)

- ① 適切な個人トレーを製作するためには、前項で示した適切に概形印象を採得して診断用模型を製作しておくことが不可欠である。
- ② 個人トレーの着脱方向を考慮し、必要最少量のブロックアウトとリリースを行う。
- ③ 機能圧印象を行うとともに、口腔内挿入時のトレーの位置付けを明確にするため、個人トレーの内面にスペーサーは付与せず、ノンスペー

ストレーとして製作する。

④ 個人トレーの外形線は、筋形成材のスペースを確保するため、床縁予想線より 2～3mm 短くする。ただし、上下顎ともに義歯床後縁部は粘膜が反転して義歯床縁を包み込む部分ではないので、短くせずに最終義歯の床縁予想線と一致させるか、やや長めに設定する。上唇小帯部は、周囲 1mm 離して設定する。

⑤ 個人トレーの厚さは撓みを抑制するため 2.0mm を確保する。

⑥ 把柄は上下顎とも、基本的に口唇の動きを規制しないように唇側へは延ばさず、かつ閉口時に障害にならない長さで、適正なリップサポートと調和してデンチャースペース内に収まるように設置する。

⑦ また、上顎用個人トレーの把柄には、最終印象採得後に口腔内から撤去する前に患者さん固有の上唇下縁の位置を記録し、適正な蠟堤製

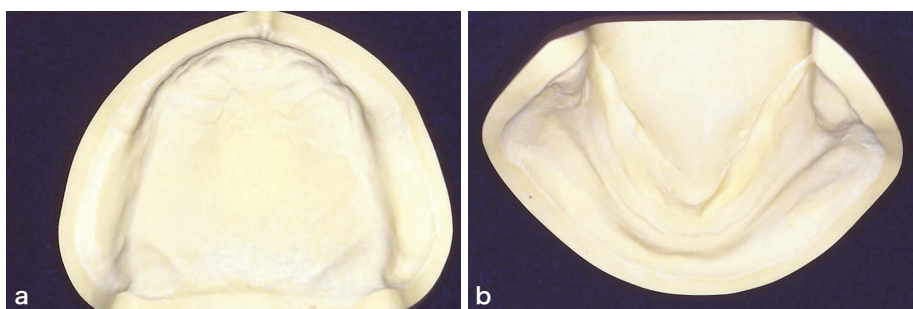


図 1-a, b 適切な概形印象から製作された模型。個人トレーの外形線は床縁予想線より 2～3mm 短くする

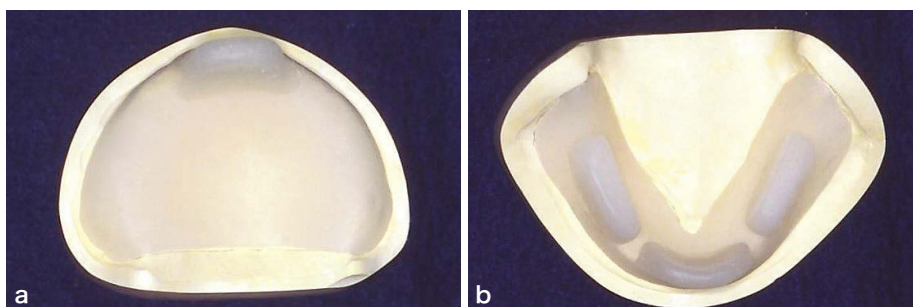


図 2-a, b 上顎個人トレーの後縁は、ハミュラーノッチをつないで、口蓋小窩を含み、下顎個人トレーの後縁は、レトロモラーパッドを覆う。上下顎とも、トレーの位置づけを確実にするため、スペーサーは付与しない

8 最終印象

筋形成面を活かした最終印象

前項では、最終印象に先立って行う筋形成について、解剖学的ランドマークを含めたインプレッションメイキングの方法を述べた。筋形成終了後の最終印象の段階で、筋形成面が跡形もなくなってしまうほど多量の最終印象材を用いて印象採得を行っている

のを見かけるが、最終印象はあくまで筋形成でボーダーを作ったトレー内面の精密印象による1層のウォッシュである。

そこで本項では、個人トレーを用いた筋形成後、その筋形成面を活かした最終印象を行う手順について述べる（図1）。

1. 上顎の粘膜は被圧縮性に富むので変形を避けて極力弱圧で行う
2. 下顎は粘膜の浮上に対応して均等加圧とする
3. 印象時の内圧はトレー辺縁からの距離の2乗に比例する
4. したがって、上顎では適正な通路の付与が必要である

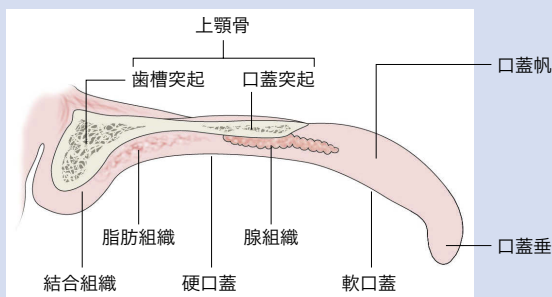
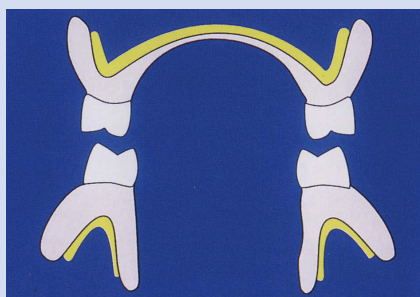


図1 上顎は無圧印象、下顎は加圧印象で行う

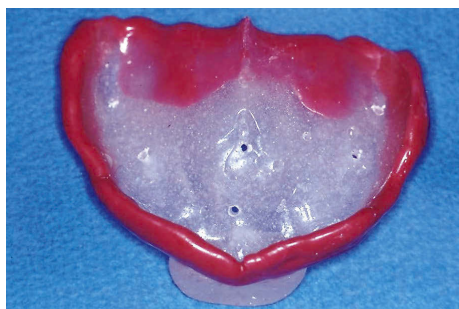


図2 上顎個人トレーには通路を形成する。通路の位置は口蓋中央やや前方にまず1つ。そこから辺縁までの距離の1/2のところに順次付与していく

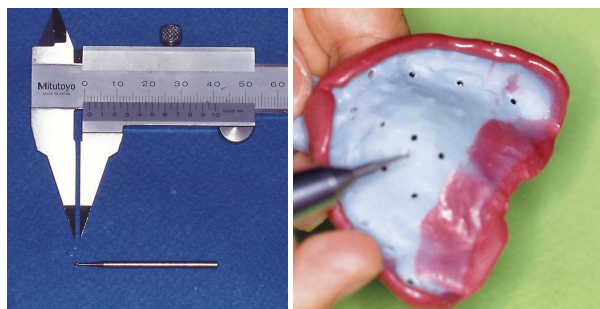


図3-a, b 通路は直径1.5mm程度のラウンドバーを用いて形成する（フィッシャーバーはレジンがからみつくため不適當）。直径が大きすぎると印象材が流出し、正確な印象が得られない

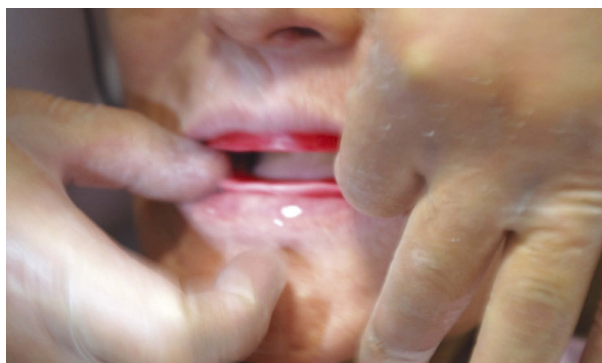


図 16 閉口時口唇接触位から上口唇の厚さと赤唇の面積から求めた安静空隙量を引いた高径まで閉口させる



図 17 再度顎位の確認を行い、上下の口唇のリップサポートの確認して、上下の蠟堤を焼き付ける

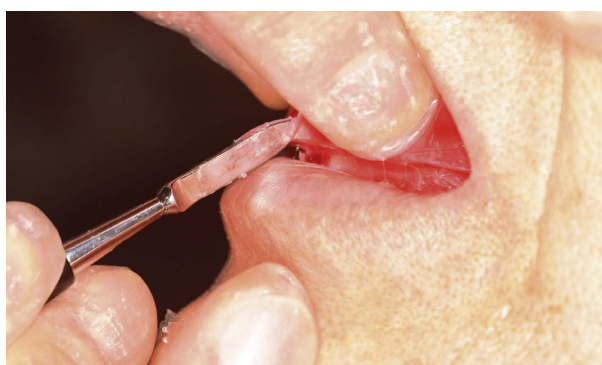


図 18 正中線の記入



図 19 スマイルライン（上唇線）の記入



図 20 スマイルライン（微笑線）の記入

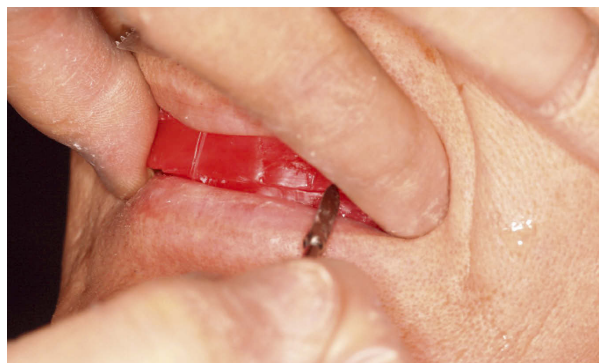


図 21 鼻幅線の記入



図 22 指標線の記入を行い、上下咬合床を一塊として取り出す



図 23 口腔内から取り出し、上下基礎床の干渉がなく、十分に焼き付けられていることを確認する

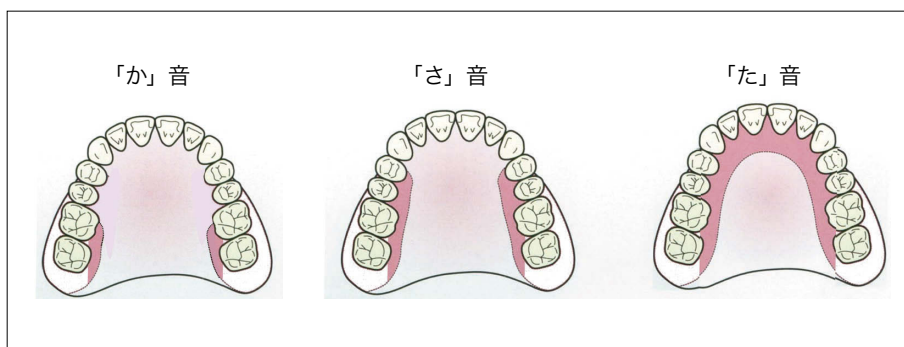


図 34 パラトグラムにより「さ」と「た」の発音を確認する

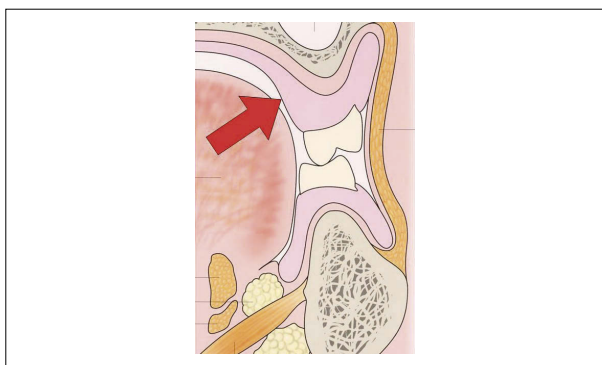


図 35 スピーチゾーン以上に口蓋側後部が問題となるケースが多い

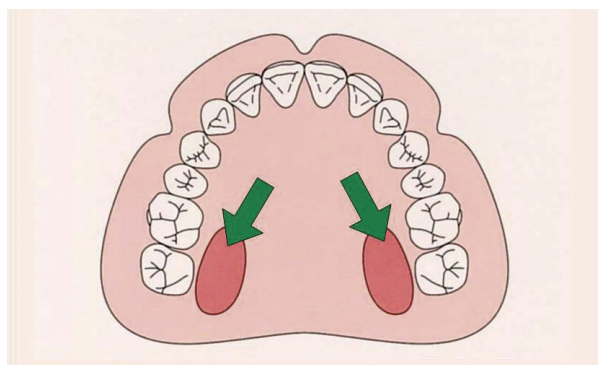


図 36 大口蓋孔付近の床の厚み. 嘔吐反射を誘発しやすいので舌の形態と調和させて凹面とする

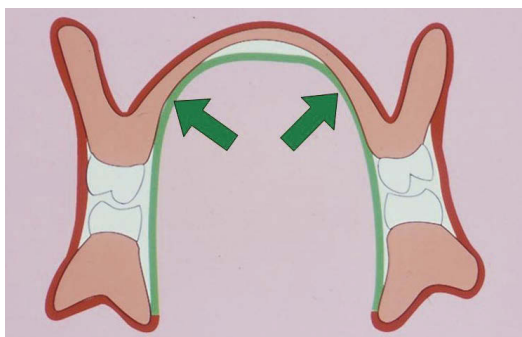


図 37 この部で舌の干渉が起きやすい

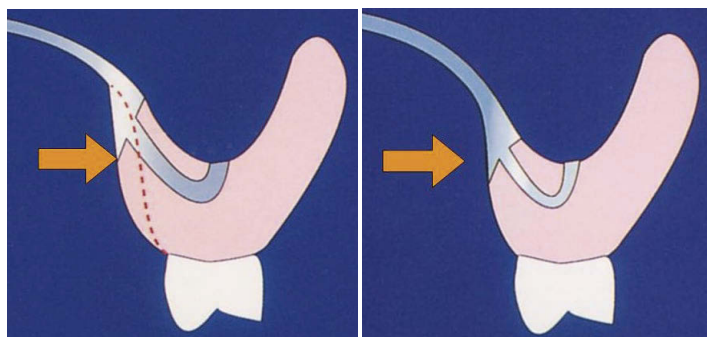


図 38-a, b 金属床における大口蓋孔付近のフィニッシュラインの設定. 3層構造にしても舌房と調和する位置でフィニッシュラインを歯槽頂方向へ寄せるのがポイントである

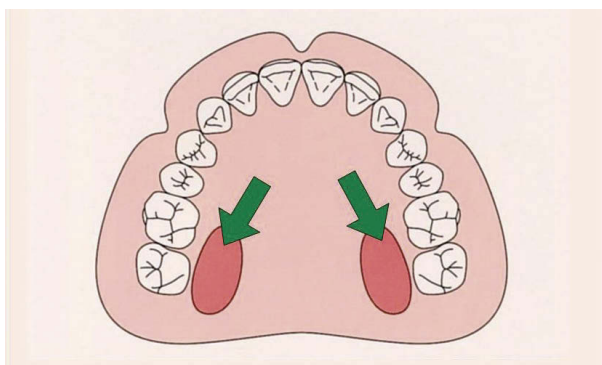


図 39 この部を凸面とせず, 舌房と調和させる



図 40 フィニッシュラインを立ち上げて設定する